

フードドライブモデル事業実施報告<概要版>

1 事業概要

家庭における贈答品等の食品ロス削減を推進するとともに、今後フードドライブを実施しようとする地域や団体等に対して側面的な支援を行っていくため、フードドライブの実施に際して必要な人員や機材等のノウハウを蓄積することを目的としたモデル事業を実施した。

また、フードドライブを日常的な地域活動へとつなげていくため、子ども未来局の協力を得て子ども食堂のパネル展を併せて実施し、市内子ども食堂の周知を図った。

なお、今回寄付された食品は、こども食堂北海道ネットワークを通じて市内の子ども食堂等に引き渡したほか、札幌国際プラザ「いまできることプロジェクト」へ引き渡した。

2 実施期間

令和3年10月25日（月）～10月29日（金）※5日間
10時00分～16時00分

3 実施場所

札幌市役所本庁舎1階ロビー（中央区北1条西2丁目）

4 実施手法

不適品の受付防止と新型コロナウイルス感染症対策のほか、本事業は家庭系の食品ロス削減を主目的としていることから、下記条件により実施することとした。

- ・開催期間中、手渡しでの受付のみとし、送付等は受けない
- ・受付名簿の作成やアンケートなどは行わずに滞留時間の短縮を図る
- ・提供先の指定や受領書等の発行は行わない

5 寄付対象

下記4項目を全て満たすもの

- (1) 賞味期限が記載されていて、残り期限が2ヵ月以上あるもの（お米は精米してから2ヵ月以内）
- (2) 常温保存が可能なもの
- (3) 未開封で、包装が破れていないもの
- (4) 食品に記載されている方法で保存されたもの

※生鮮食品、冷凍食品、アルコール飲料、サプリメント、食品表示、賞味期限表示の記載のないもの、お米券等の金券類は不可

6 実施結果

寄付・引渡総数：1,869品、552.6kg

<日別寄付量集計表>

品目	10月25日	10月26日	10月27日	10月28日	10月29日	合計	総重量
お米	3個	2個	3個	13個	3個	24個	66.2kg
乾麺	24袋	22袋	22袋	32袋	37袋	137袋	87.1kg
缶詰・瓶詰	158個	44個	30個	56個	79個	367個	99.3kg
レトルト	48個	46個	31個	64個	37個	226個	61.1kg
インスタント	27個	45個	13個	31個	43個	159個	16.1kg
お菓子	150個	24個	31個	76個	82個	363個	52.5kg
飲料	49個	45個	36個	50個	43個	223個	66.5kg
調味料	22個	12個	11個	17個	40個	102個	44.3kg
のり・ふりかけ等	18個	24個	14個	7個	47個	110個	7.7kg
その他	39個	13個	7個	80個	19個	158個	51.8kg
合計	538個	277個	198個	426個	430個	1,869個	552.6kg
受付人数	38人	29人	34人	41人	47人	189人	

<寄付品の傾向等>

- ・数量としては、缶詰・瓶詰やお菓子が多く持ち寄られた。
品種として、乾麺では素麺、缶詰・瓶詰では鯖缶、レトルト食品はカレー、その他ではアルファ化米等の非常食が多かった。
- ・受付人数は増加していったが、25日、26日、27日にテレビやラジオで紹介された影響もあると思われる。時間帯としては午前中が多く、14時以降は大幅に減少した。

<引渡数量集計表>

	子ども食堂 (22カ所)	国際プラザ	その他	合計
お米	60.2 kg	6.0 kg	0.0 kg	66.2 kg
乾麺	46.3 kg	35.8 kg	5.0 kg	87.1 kg
缶詰・瓶詰	70.0 kg	25.0 kg	4.3 kg	99.3 kg
レトルト	29.9 kg	26.6 kg	4.6 kg	61.1 kg
インスタント	10.1 kg	5.9 kg	0.1 kg	16.1 kg
お菓子	36.7 kg	13.7 kg	2.1 kg	52.5 kg
飲料	47.1 kg	17.6 kg	1.8 kg	66.5 kg
調味料	30.1 kg	8.2 kg	6.0 kg	44.3 kg
のり・ふりかけ等	5.7 kg	2.0 kg	0.0 kg	7.7 kg
その他	43.9 kg	6.5 kg	1.4 kg	51.8 kg
合計	380.0 kg	147.3 kg	25.3 kg	552.6 kg

7 モデル事業の検証（○効果 ●課題等）

【実施期間等】

- 今回のモデル事業は平日5日間、日中の開催であり、公共施設等での常設受付とほぼ同等の条件で実施。札幌市においても他都市と遜色のない回収量にはなるものと思われる。
- 初日～3日目にテレビ・ラジオで報道され、その後持ち込みが増加。ある程度の期間をもって実施することが効果的と思われる。
- 寄付される品種が季節的な影響を受けることが判明。開催時期の検討要素に加える必要あり。
- 各日とも午前中の持ち込みが多く 14 時以降は大幅に減少。従事者の人員効率を考えると昼過ぎころまでの実施でも十分と思われる。

【開催場所】

- 寄付品を引き取る側は基本的に自動車を利用することから、開催場所の選定にあたり駐車場の利用可否は大きく影響すると思われる。
- 今回、一定程度の成果はあったものの、寄付者の利便性などを考えると日常生活圏での開催がより効果的と思われる。

【周知広報】

- 広報誌、チラシ（区役所等で配布）、ホームページ、SNS (Facebook) で周知したほか、テレビ・ラジオで報道された。一部参加者からの口頭聴取によると、認知媒体は広報誌とテレビが多く、周知手段としては適当であったと思われる。
- 不適品や注意事項に関するトラブルはなく、自身で期限等の確認をしてくる市民も多数いた。情報提供の内容としては適当であったと思われる。



▲ 周知用チラシ（両面）

【対象品の条件設定】

- 判断に迷うような品種の持ち込みはほぼなかった。具体の品種名等もチラシに掲載したことが効果的だったものと思われる。
- 一部子ども食堂スタッフから、各家庭での余剰食品の場合、少量多品目になりやすく、品目によっては扱いにくいといった声もあり。提供先団体の特性や規模によって必要な食品が異なるため、種類等の打ち合わせは入念に行う必要あり。
- 賞味期限等の残り期限について、2か月あれば自身で消費可能という意見もあり。食品ロスの削減を目的とするには期限設定が長過ぎると思われる。
- 引渡し先が多くなるほど、振り分けや調整等の期間が必要となるため、残り期限の設定は長くなる。地域等で実施するのであれば連携団体は絞る方が良いと思われる。

- 今回のモデル事業では、札幌国際プラザとも連携し、留学生の方々へも食品を提供したため、子ども食堂ではあまり需要のなかったレトルト食品なども引き渡すことができた。提供する団体が限られている場合は、米・乾麺のみなど、食品を限定して実施することも有効と思われる。

【実施体制（受付・仕分け）】



- 入口そばに“のぼり”を設置したこともあり、案内等のトラブルはなかった。
- 計4人体制で実施。2人が受付と期限等の確認を行い、2人が集計と仕分けを担当。待ち時間が生じることはなく、人員としては十分と思われる。
- 交代での昼食休憩の際は、受付と期限確認を重視し、集計と仕分けは余裕がある時に実施。受付一人分ずつをダンボール箱に入れ保留することで、後の集計を可能としたことは効果的と思われる。
- 受付用のスペースについて、寄付品をカバン等から取り出した際、確認等の作業を行うため、広めのスペースを確保した方が良かったことが分かった。今回は長机2台を使用したけど、2人分の受付窓口を設けるのであれば適当と思われる。
- 今回は10項目に分類して仕分けを実施。傾向を見るための分類としては概ね適切であったと思われる。なお、地域等で小規模に実施するのであれば、詳細な仕分けは不要と思われる。
- 仕分け及び引渡し用としてダンボール箱を活用。コンテナや保温ボックスの活用なども考えられるが、安価かつ返却等の手間を考慮すると、ダンボール箱は効率的と思われる。



【引渡し】

- 各子ども食堂への引き渡しは、随時各子ども食堂が引き取りにくる形で行い、概ねトラブルはなかった。
- こども食堂北海道ネットワークに加盟している市内の子ども食堂全てに呼び掛けを行ったが、やはり遠方の子ども食堂は、食品を受け取りにくることが難しいとのことであった。引渡し先が取りに来るとい手法をとる際には、実施場所との地理的な要因も検討しておく必要がある。
- 今回はモデル事業の検証のため、引渡し時に種別ごとの計量を実施。一定の手間はかかるため、地域等での実施の際は必要性を検討して良いと思われる。
- 団体によって必要とする食数や傾向が異なるため、上限などは定めず、その時点での寄付品全体から自由に選択してもらうこととした。子ども食堂からの反応は良好であったが、今回は国際プラザへの最終提供を予定していたことから可能な手法であり、地域等での実施にあたっては全量の引き渡しを前提にした方が良いと思われる。

【パネル展】

- 市内子ども食堂の周知を目的とし、併せて実施したパネル展について、食品の提供者以外にも多くの市民に見ていただいた。配布した市内子ども食堂一覧は当初用意した30部が2日でなくなるなど、一定の効果があったと思われる。



8 まとめ

フードドライブは食品ロスを減らすための手段の1つとして有効であるが、対象とする食品の残り期限などを考慮すると、各団体等へ食品を直接持ち込むか、地域等で個別の提供先と小規模に実施することがより効果的であり、特に、各団体への持ち込みは、フードドライブの実施期間に関わらず食品ロスを削減できるという点で非常に有効であると考えられる。

なお、提供先の団体によって必要とする食数や傾向が異なることから、行き先の無い食品が集まってしまわないよう、地域等で実施する場合には、提供先団体と品目や引き渡しについて十分な打ち合わせを行うことが重要である。